

4 章 地域福祉生活支援活動の推進

新田 照夫、菅原 良子

1 節 変貌する地域経済と求められる新しい生活支援活動の推進

1960年代に始まる高度経済成長は、農村を含めて日本の社会全体を工業社会あるいは都市社会化していった。すなわち、かつては農民であった人々が土地を離れて、工場労働者に変貌していったのであるが、農家の次男・三男を問わず、家の跡継ぎと言われる長男までも土地を離れていく社会になっていったということである。これは集团的農業活動を軸にして、共同生活が成り立っていた日本の地域社会を、根本から崩壊していくことになった。すなわち私達の生活の中にあつた「出る釘は打たれる」といった閉鎖的封建社会から個人を解放した一方で、大家族あるいは地域社会の中での共同した生活相互扶助システムをも崩壊させていったのである。その結果、核家族の集まりとして出発した日本の地域社会全体が高齢化社会を迎え始めた今日、私達は改めて新しい生活相互扶助組織を求めるようになったのである。

ところで前述にもあるように、かつての農村共同体の生活相互扶助システムというものは、集团的農業作業という地域の経済活動の中から形成されていったものである。したがって、今日都市化してしまっている日本の地域社会において、新しい生活相互扶助システムを組織するためには、何らかの経済的基盤なくして維持できるはずもない。高度経済成長以降は、かつての農村共同体の中で行われてきた生活支援活動に代わって国が社会福祉政策を実施してきたのであるが、今日では国の財政的負担が巨大化し社会福祉政策そのものを維持できなくなってきたことが、生活相互扶助システムには経済的基盤が不可欠であることを示している。1997年に介護保険法が成立し、国は国民の税負担によって社会福祉政策を維持することを期待しているが、本年4月の同法の施行以来、人々の多くは、介護保険制度の適応サービスの範囲が狭いために同保険制度の適応外の

サービスを求める傾向が強くなっていて、多くの自治体も同保険制度の適応外サービスの提供に力を入れるようになってきている。そこで本稿では、生活協同組合(以下、生協)の組合員による「生活支援活動」の分析を試みたい。(新田照夫)

2 節 生協組合員による生活支援活動の全国的動向

生協において、組合員によって行われている福祉活動は、①家事援助活動を中心とした「くらしの助け合いの会」(以下、「助け合いの会」)などの活動、②ふれあい食事会と配食活動、③いきがい活動、④福祉に関する学習会などである⁽¹⁾。

①の「助け合いの会」は、組合員同士の日常生活においてちょっと困ったことを助け合う有償のボランティア組織である。

1983年にコープこうべに設立されて以降、全国の生協にとりくみが広がり、1999年度までに75生協で設立されている。1999年度の会員数は56,437名(前年度比8,921名増・118.0%)、活動時間の年間合計は1,217,725時間(前年度比245,371時間増・125.2%)となっており、会員数・活動時間ともに1998年度よりのびている(表1参照)。会員別の内訳は、「活動会員」(援助する会員)が22,986名(前年度比4,599名増・125.0%)、「利用会員」(援助される会員)が19,893名(前年度比2,953名増・117.4%)、「賛助会員」(活動はできないが、会の趣旨に賛成して会費を納入することにより会の運営に協力する会員)が13,558名(前年度比1,369名増・111.2%)となっている。

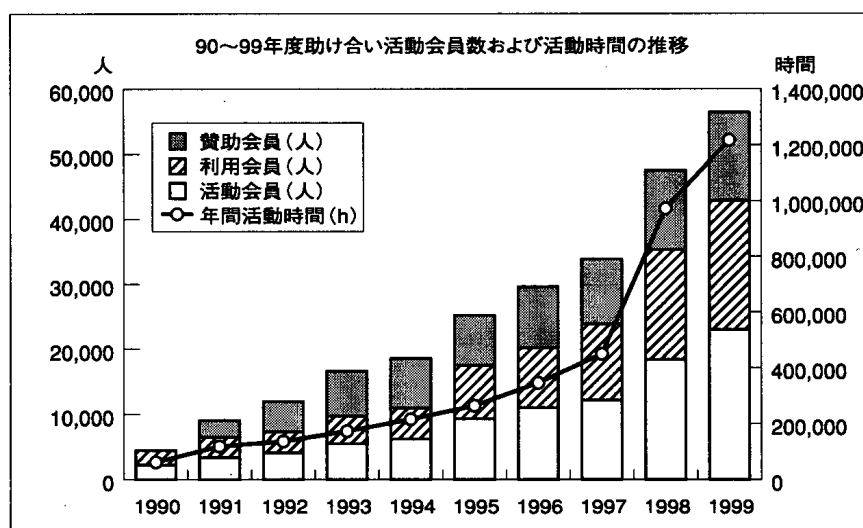
「助け合い」の内容は、高齢者世帯を中心に洗濯や掃除、食事作り、買い物などの家事援助や産前・産後の家事援助活動が中心である。また、最近は会員の要望にそって、「子育て支援」という目的から母親の負担軽減のための家事援助活動や保育活動、また「介助・介護」といった活動をおこなう「たすけあいの会」も出てきている。このように、地域のニーズに耳をかたむけながら、活動内容の間口を広げたことが会員増につながっている(特に子育て支援の活動により若年層の会員が増加)。また、「説明会」「学習会」を行うことにより、活動エリアを広げている。

②ふれあい食事会と配食活動は、食の安心・安全を追求してきた生協が、地

4章 地域福祉生活支援活動の推進

[表1] 1990年度～1999年度助け合い活動会員数・活動時間

年度	活動会員(人)	利用会員(人)	賛助会員(人)	会員数合計(人)	年間活動時間(h)
1990	2,222	2,236	—	4,458	61,638
1991	3,358	3,077	2,618	9,053	118,155
1992	4,047	3,254	4,661	11,962	135,994
1993	5,451	4,257	6,859	16,567	172,549
1994	6,204	4,741	7,609	18,554	215,483
1995	9,325	8,195	7,658	25,178	263,688
1996	10,997	9,157	9,490	29,644	345,376
1997	12,175	11,703	9,984	33,862	449,074
1998	18,387	16,940	12,189	47,516	972,354
1999	22,986	19,893	13,558	56,437	1,217,725



※1998年度に、活動時間が大幅に伸びているのは、東京マイコープ、神奈川W.co連合会およびグリーンコープ福祉運籌基金と連携しているワーカーズコレクティブ等の活動を新たに加えたため。

(コープくらしの助け合いの会全国ネットワーク・日本生協連組織推進本部福祉事務局『コープくらしの助け合いの会活動全国ネットワーク情報』No.14、2000年7月、p.4)

域の高齢者のコミュニケーションの場、健康維持のための食生活提案の場、地域の人と人とのネットワークづくりとしてとりくんでいる活動である。「ふれあい食事会」は、一人暮らしの高齢者を中心に集まってもらい、ボランティアがつくった料理を食べながら交流するというものである。「配食活動」は、食事会に来られない高齢者などにつくったお弁当を家まで届ける活動である。

1999年度は、41生協・261ヶ所で取り組まれた（前年度は45生協・252カ所）。

1年間で、86,876食の食事づくりがおこなわれたことになる。以上が「ふれあい型」と呼ばれる食事会・配食活動である⁽²⁾。他に、配食活動に毎日とりくんでいる生協もある。いわて生協が中心になり設立した特定非営利活動法人「もりおか配食サービス」（いわて生協は「ふれあい型」も実施）、神奈川ワーカーズ・コレクティブ連合会とグリーンコープ福祉連帯基金の食事サービスワーカーズの3生協で、計18ヶ所で286,397食を配食している（1999年度）。

③のいきがい活動は高齢者が自主的にいきがいを作り出す活動である。1998～1999年度モデル事業として、さいたまコープとコープこうべがとりくみ、今後この活動を全国に普及予定である。この活動は、日本が急速に高齢化社会をむかえている今、予防介護としても大変重要な活動になってくるものと思われる。

④の学習会については、各地区でおこなう福祉についての学習会「生き生きライフ」講座などの学習会がおこなわれている。

1996年には情報交換や交流の場として「コープくらしの助け合いの会全国ネットワーク」を結成している。

介護保険の施行にともない、介護サービス事業における生協への期待が高まっているが、ボランティアである「助け合いの会」では恒常的に一定量のサービスをするには限界があるとして、生協が直営事業にのりだしたり、社会福祉法人を設立したりしているところや、さらに、「助け合いの会」を基盤としてワーカーズコープを設立し、そのワーカーズコープに生協が事業委託したり、NPO（特定非営利活動法人）をたちあげている生協もある。（菅原良子）

3 節 生協組合員による生活支援活動の事例

3 節では、福祉に関わる生協の組合員活動とは具体的にどんなことが行われているか、「みやぎ生協」と「コープしずおか」を事例として「助け合いの会」を中心にとりあげる。

みやぎ生協の「コープくらしの助け合いの会」は、1985年9月に会員83名（援助する会員59名、援助を受ける会員24名）で仙台市の一部地域と名取市で始まり、2000年で15周年を迎えている⁽³⁾。2000年3月現在、活動地区は全県に広が

4章 地域福祉生活支援活動の推進

り(20地区)、会員数は2,000名(援助する会員920名、援助を受ける会員1,080名)、年間活動時間は30,000時間を超え、2000年に援助する会員が減少したため、初めて会員数が前年度を割り込んだが(会費の納入方法が、原則、現金払いから口座自動引き落としへ変更になったため)、それ以外は会員数、活動時間ともに延びつづけてきた(表2参照)。

事務局はみやぎ生協生活文化部に置かれ(事務局は、援助を受ける会員と援助する会員との調整・連絡役であるコーディネーター2名、事務パート1名、パソコン入力アルバイト1名の体制)、会員の中から総会で選任される幹事8名(内2名は援助を受ける会員)、各地区のコーディネーター計25名の体制で活動がすすめられている。他に各地区には地区コーディネーターを補佐する世話人がおり、地区の運営がすすめられている。

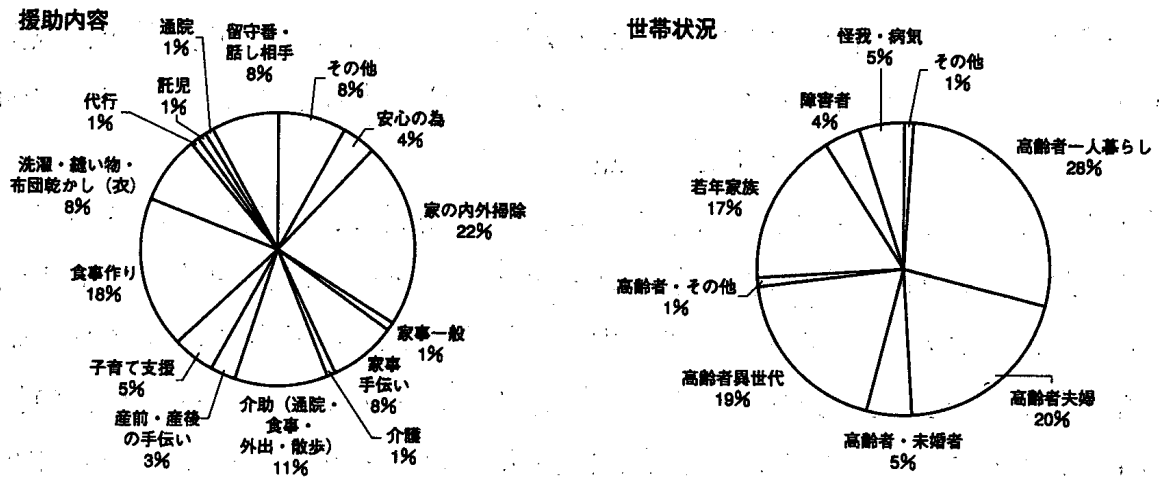
援助を受ける会員も援助する会員も入会金1,000円、年会費1,000円(加入年

【表2】みやぎ生協こ～ぶくらし助け合いの会
1985年度～1999年度会員動向・活動時間

年 月	発足した地域	援助する会員	援助を受ける会員	会員総数	年間活動時間
1985年9月	仙台・名取	59名	24名	83名	
1986年3月		65名	39名	104名	528時間
1987年3月		74名	56名	130名	1,690時間
1988年3月		95名	87名	192名	2,198時間
1989年3月		121名	119名	240名	3,131時間
1990年3月		134名	158名	292名	4,130時間
1991年3月	石巻	188名	208名	396名	7,261時間
1992年3月	塩竈・多賀城	237名	254名	491名	9,314時間
1993年3月		273名	287名	560名	10,690時間
1994年3月	古川	342名	382名	724名	13,365時間
1995年3月		406名	455名	861名	15,841時間
1996年3月	白石	527名	615名	1,142名	21,167時間
1997年3月	柴田・亘理	768名	852名	1,620名	24,555時間
1998年3月	加美・玉造・岩沼・気仙沼・黒川	906名	997名	1,903名	25,532時間
1999年3月	利府	1,001名	1,043名	2,044名	27,076時間
2000年3月	栗原	920名	1,080名	2,000名	31,706時間

(『こ～ぶくらしの助け合いの会16回総会』2000年5月、p.3)

【表3】みやぎ生協こ～ぶくらし助け合いの会 援助内容と世帯状況



(『こ～ぶくらしの助け合いの会16回総会』2000年5月、p.11)

【表4】みやぎ生協こ～ぶくらし助け合いの会 会員構成

年代	援助をする会員				援助を受ける会員			
	女	男	計	比率	女	男	計	比率
20代	8	0	8	0.9%	16	1	17	1.6%
30代	55	3	58	6.3%	140	4	144	13.3%
40代	198	1	199	21.6%	64	14	78	7.2%
50代	337	3	340	37.0%	50	16	66	6.1%
60代	231	16	247	26.8%	106	14	120	11.1%
70代	54	8	62	6.7%	259	42	301	27.9%
80代	6	0	6	0.7%	232	61	293	27.1%
90代	0	0	0	0.0%	39	22	61	5.6%
計	889	31	920	100.0%	906	174	1080	100.0%

(『こ～ぶくらしの助け合いの会16回総会』2000年5月、p.11)

度は免除)を支払い、会員となる。

活動内容は、軽易な老人の世話、買い物、食事づくり、掃除・洗濯などの家事援助活動である。最初は高齢者世帯中心だったものが障害者や病気の人への対応、子育て支援と対象が広がってきた(表3参照)。また、援助をする会員の中には数は少ないが男性の会員もあり、庭木の手入れ、草むしり、家電修理、大作業などをおこなっている。援助する会員は40代から60代が多く、援助を

4章 地域福祉生活支援活動の推進

受ける会員は30代と60代から80代に多い（表4参照）。援助する会員は子育てが一段落し時間的に余裕ができた女性たちであること、援助を受ける会員の多くはまだ子どもが小さく子育てが大変な世代と高齢者であることがわかる。また、援助する会員も受ける会員も女性が圧倒的に多く男性が少ない。援助を受ける会員は、1単位（2時間）あたり1,000円の謝礼と交通費実費を支払うことになっている。

〔表5〕みやぎ生協こ～ぶくらし助け合いの会の会員の声

〔表5-1〕第13回総会 体験発表①

支え支えられるを実感した私

3年前の94年の1月に、友人の母親の病院付添がどうしても2日間都合がつかないというので、ピンチヒッターで入ったのが、実の父や母以外のお年寄りとの初めての関わりでした。

身内のように感情的にならずに接することができ、その上、友人からは感謝されたことが一歩踏み出して、「こ～ぶくらしの助け合い」に入るきっかけだったと思います。

（中略）

Aさん、Bさん、Cさん、それぞれに違った援助の内容で関わりあうことになったのですが、全部に共通して言えることは、助けになればと思ってすることから、私が教えられることが大きいなあと感じさせられることでした。

（中略）

私の精神的な不安や葛藤を悟られないように、普段と変わらない生活をしていくのが結構大変な時に、この三人の方々から、それぞれの生き方を見せてもらえたことと、ご自分も大変なのに、暖かく見守り励ましていただきました。

残念ながら、主人は昨年7月に他界いたしました。「助け合い」をしばらく休ませていただきました。

現在の私は、以前より少しだけ心の痛みが分かってきたように思うのと、ショックの後の自律神経失調とが混沌としている状態ですが、これからも自分の殻に閉じこもらず、そして、ぬけ殻にならない為にも、「支え支えられる実感」を味わいたく、再スタートしたいと思っております。

（『こ～ぶくらしの助け合いの会14回総会』1998年6月、p.21～22）

〔表5-2〕活動記録①

Mさん（50代女性 一人暮らし 腰痛で歩行困難96年入会）

依頼内容 食事づくり、掃除、話相手

98年3月17日

突然の私の転居で、今日が最後の活動となる。先週コーディネーターさんからMさんにはその事を伝えておいてもらったので「お忙しいのにいらして下さってありがとう」と言ってもらい、かえって恐縮してしまう。約5カ月間（2月はお休みさせてもらったが）、色々なお話をしている内にこちらの方が励まされたり、なぐさめられたり、元気づけられたり……。

助け合いの会の活動は本当に自分にとって「生きる」ということの勉強となり考え方の幅も少しは広がった様な気がする。新しい土地でも、又ちがった形になるかもしれないが、活動を続けたいと思う。ありがとう。（K・Tさん 40代 入会2年目）

（『こ～ぶくらしの助け合いの会14回総会』1998年6月、p.35）

【表5—3】第13回総会 体験発表②

頼りは助け合いの会

私は女ばかりの三人姉妹の長女です。三人とも結婚し、皆、夫の転勤で次第に親元から離れ、遠い地方に住んでいます。父が80歳を迎えた頃から、せめて近くに住んで欲しいと度々申し出ていたのですが、住み慣れた仙台から離れられず、いつも曖昧な返事しか貰えませんでした。両親はいくつかの持病を持っていましたが、定期的に健診を受け、食事などの健康管理に気をつかい、90をすぎても二人で元気に暮らしておりました。

ところが、5年前、父が倒れ、2カ月の入院生活の後退院しました。長く寝ていた為、足元がおぼつかなく、家の中でもバランスを崩しそうで、目が離せませんでした。私たちも、ふた月の間、交代で病室につめて看護していましたので、それぞれの家庭も限界の状況になっており、少し落ち着いたところで、一度帰って行かなければと思っておりました。老齢の母一人に、この父を任せて帰るのかと思うと、私たちは、後髪をひかれる思いでした。

このような時に、COOPの「くらしの助け合いの会」のことを教えて戴き、早速入会し来てくださったのがAさんでした。Aさんのお人柄に父も母もすっかりファンになり、心からお頼りしている様子でした。私たちもいい方に来て戴けたことを喜んでいました。又、一番不安に思っていた入浴についても、区の保健婦さんが、血圧チェックの上で、入浴させて下さることになり、ひと安心して、私たちはそれぞれの家庭に帰って行きました。

(中略)

この5年間、家庭に関わる介護の面で「くらしの助け合いの会」の皆様にごだけ助けていただいたかわかりません。長い介護になりますと、介護する側にもその家族も含めて、病人がでたり、お悔みができたりと予測できないことがおこってきます。突然のことで困りきってご相談すると「くらしの助け合いの会」は、こちらの身になって、素早く適切な対応をしてくださりました。また、来てくださった会員の皆様には、お仕事と併せて心のケアもしていただいたような気がします。これは多分ご本人には意外かもしれませんが……、暖かいお人柄にふれたとき、こちらの緊張つづきの気持ちがほぐれていったのです。このような網渡りの介護でしたが、父母に関わってくださった皆様のお陰で、ハッピーエンドになり、現在、父も母もそれなりに元気に暮らしております。一段落ついた今、「両親の老後の問題」を、つい先送りにして過ごして来たことを反省しております。

近く、介護保険法が成立するような話を聞いていますがこの度の私の経験からこの「くらしの助け合いの会」のように窮地にたって困り果てているとき、即、手を差し伸べ暖かく援助して下さるボランティア活動は、大変貴重な有り難いものでした。公的な援助と補いあいながら、会独自のご活躍を展開していかれますように願っております。

最後になりましたが、関わって下さいました皆様、ほんとうに有難うございました。

(『こ～ぶくらしの助け合いの会14回総会』1998年6月、p.23～24)

援助活動の他、1年に1回の総会、幹事会、新入会員や新人コーディネーターに対する研修、全体・各地区コーディネーター会議、各地区世話人会、各地区の会員のつどい、ふれあい弁当などが行われている（各地区の活動は行われていない地区もある）。また、みやぎ生協の「コープ福祉ネットワークセンター」⁽⁴⁾や「ふれあい便」と、会員の相互紹介、情報交換などの点で連携したり、「助け合いの会」のコーディネーターがみやぎ生協「福祉情報・相談センター」の相談員として対応しそのための研修をおこなったり、福祉公社・仙台市福祉課・

4章 地域福祉生活支援活動の推進

住民参加型住宅福祉サービス団体と「介護サービス非営利団体ネットワークみやぎ」をとおして研修・イベント等で連携を深めたりなど、「助け合いの会」の中だけでの活動にとどまらず、行政や地域の諸団体と連携し福祉をつうじて地域ネットワークをつくっている。

【表5-4】活動記録②

Hさん60代一人暮らし骨折で歩行が不自由

依頼内容 介助、家事援助

99年1月25日 13:00~16:00

今日は先祖の命日でお墓参りに行きたいので、一緒にいってほしいという電話があり車で伺いました。一人ぐらしなので気かけながらも墓参りできなくて気持ちが落ち着かないのだそうです。

お伺いしましたら、お供物用のおはぎやら煮物をたくさん作って用意万端整えてまっておられました。天気もおだやかな一日だったので、ゆっくりと気の済むまでご先祖様のお参りをして帰りましたので気も安らいだと思います。こんな時、あゝ助け合いの会の活動をしていて本当に良かった……。人の心の安らぎを与えられる仕事に微力でも自分が役立てる喜びのようなものを感じ、これからの力になりました。

(援助する会員50代入会6年目)

(『こ～ぶくらしの助け合いの会15回総会』1999年5月 p.34)

【表5-5】第15回総会 体験発表③

初めての援助活動

3月に発足した利府地区の『助け合いの会』は生まれたての暖かい気持ちが現在進行形で、どんどん成長していっているところです。そんな中での活動体験をお話いたします。

私は小学1年生と2才の息子の育児に追われる30歳の主婦です。助け合いの会に入った事を人に告げると「助けてもらうの?」と聞かれ、その時はむくれたものですが、今ではそうかもしれない、助けて頂いているのは自分かもしれないと言う心境になっています。

私がお手伝いに伺ったのは利府のTさん宅です。ご主人との二人暮らしでした。内容は掃除…とは言ってもきれいなお宅です。「お家を大切にしてきたTさんの主婦としての尊厳を大切に活動しよう…」私がたった一つ注意と言うか、心に留めた事はこの事でした。必ずしも手際が良いとは言えない仕事ぶり、お話し相手としても人生経験不足で物足りないであろう私に、ご夫婦はいつも励ましの言葉をかけて下さいます。又、初めての打ち合わせの時、私が「大丈夫です。任せて下さい。」と指でOKマークを作ったのが印象に残ったとのこと。私に「地のままでいいんだよ…」と言って頂いているようでうれしい気持ちで帰りました。いつも子供べったりの生活を送る私でしたが家族にも変化が起きました。上の子が、助け合いの会の日にはおりこうに留守番をして、ママを困らせない事でボランティアの一翼を担っているつもりになり、夫も協力と言うよりは子供と仲良くなるチャンスを楽しんでます。

私ども夫婦も、40年ぐらいたった時、Tさんご夫婦のような、慈しみ、いたわりあって生活している…そのような関係でありたいと思うようになりました。まさにご夫婦に『私と家族の人生勉強の手伝い』をして頂いたと思えるのです。

はじめに助けて頂いているのは自分かもしれない…と申しましたのはそういう事です。いつか「ご夫婦のお役に立てたと実感する日が来るといいなあー」と切に思います。最後にTさんご夫婦のご健康をお祈りして感謝の気持ちとさせていただきます。

(『こ～ぶくらしの助け合いの会16回総会』2000年5月、p.21)

〔表5—6〕 第15回総会 体験発表④

感謝あるのみ

母がこ～ぶくらしの助け合いの会に援助を受ける会員として入会したのは、平成6年1月のことでした。以後、助け合いの方々に支えていただき母の介護を続けることができました。「感謝」という言葉では言い尽くせないくらいの有り難い想いを抱いております。

(中略)

長男の嫁としてやれるだけはやってあげたいとおもうのですが、言っても言うことをきかない母をどう扱っていいのかわからなくなって私の精神状態が悪くなり、ストレスが溜まってしまいました。

そういった私の精神状態を和らげてくださったのも、家に来てくださった会員の方々でした。私の訴えをしっかり受け止め、何気ない雑談の中で私を癒してくださいました。

援助をしてくださる会員みなさんにお世話をいただかなかっただら、介護によるストレスのために潰されていたのではないかと思います。

今年の1月8日に享年92歳で黄泉の国に旅立ちましたが、私に素晴らしい財産を残してくれました。それは助け合いの会の会員憲章精神そのままに活動していらっしゃるみなさまとの結びつきです。

こ～ぶくらしの助け合いの会の援助をする会員の方々は、おひとりおひとり会の目的である敬愛と信頼に満ちた豊かな人間関係を作り、あたたかな社会を目指して誠心誠意努力していらっしゃるがよくわかりました。そしてそれが大げさではなく、慎ましやかで目立たないようにさり気なく行ってらっしゃることが素晴らしいと思いました。

母はもとより、私までもこんなにお世話いただいて有り難かったという気持ち、感謝の気持ちをなんとか表したいと思い、今年1月20日に援助を受ける会員から援助をする会員に登録替えをして、奉仕活動を始めました。私を助けてくださいました素晴らしい方々を目標にこ～ぶくらしの助け合いの会会員憲章にのっとり、少しずつ努力をして私自身を高めていきたいと思っております。

〔「こ～ぶくらしの助け合いの会16回総会」2000年5月、p.22～23〕

その他広報活動としては、会報の発行があげられる。1999年7月からは、それまで独自に出していた会報が、宮城生協の福祉活動の情報誌である「はあと」(隔月発行)に組み込まれるようになった。

介護保険制度が施行され、みやぎ生協も社会福祉法人を設立して介護サービス事業に乗り出す中で、「助け合いの会」と地域の諸団体の連携が深められてきているといえよう。

「助け合いの会」の会員の声をみると(表5参照)、援助を受ける会員は単に「家事等の援助」を受けているだけでなく「精神面での援助」を受けていることがわかる。「助け合いの会」が精神的な支えになっているといえる。また、援助をする会員にとっても、自分の母親ほど年代の違う援助を受ける会員との話や援助の仕方を考えることによって様々なことを学んだり、援助をした会員からの言葉に感激したり、援助をした会員が元気になっていくのを自分のことによ

うに喜んだり、「助け合いの会」が学ぶ場、精神的な充実感を味わえる場になっていることがわかる。「助けて頂いているのは自分かもしれない」、「『生きる』』ということの勉強となり考え方の幅も少しは広がった様な気がする」という言葉にあるように、援助をする—受けるという一方的な関係ではなく、まさに援助する会員も受ける会員も「助け合い」の場になっているということがわかる。

地域共同体が崩壊し、昔ながらに行なわれていた「助け合い」の関係が地域で壊れた今、地域における新しい「助け合い」あり方、「協同」のあり方がここにみることができるのではないだろうか。

もう一つの事例は「コープしずおか」の特定非営利法人ワーカーズコープ「夢コープ」の事例である⁽⁵⁾。1987年、コープしずおかが出した「長中期計画」の福祉指針を実現するため、組合員によって「福祉チーム」がつけられた。その「福祉チーム」により「ヘルパー養成講座」や「ホームヘルプ組織づくり」が答申され、その一環としてつけられたのがワーカーズコープ「夢コープ」であった⁽⁶⁾。コープしずおかがおこなった「ホームヘルプ養成講座」の受講生によって、1990年6月に設立準備会が開催され、91年3月に設立された。ワーカーズコープの形態をとった理由は、1988年に7つの生協が合併してできたコープしずおかが、当時経営危機の状態にあり、福祉事業を生協本体でおこなうのは厳しい状況にあったからである。コープしずおかからの委託というかたちで福祉活動をおこなっていた。全国の生協では、生協の組合員活動の一貫として「くらしの助け合いの会」を結成し活動をおこなったり、その会を基盤としてワーカーズコープなどの形態に発展する場合はみられるが（特に近年介護保険制度との関係でみられる）、1990年の段階で最初から生協とは独立した形で組織されるのは珍しいといえる。

ワーカーズコープという任意団体としての8年半の活動の後、1999年9月にNPO法人格を取得し、特定非営利活動法人「ワーカーズコープ夢コープ」となった。法人格を取得したため介護保険事業にも参入でき、12月には居宅介護支援事業者、2000年2月には居宅介護サービス事業者（訪問介護）としての指定を受けている。

「ワーカーズコープ夢コープ」は、静岡県内を「東部」「静岡市・清水市」「中

[表6] 夢コープ 1999年度活動経過

4 月	役員、役員候補合同学習会 1999年度通常総代会 特定非営利活動法人 ワーカーズコープ夢コープ設立総会 託児研修
5 月	特定非営利活動法人設立認証の申請
6 月	第1回リーダーヘルパー全体研修会 事務局移転 介護保険プロジェクトチーム発足
7 月	コープしずおか主催のヘルパー養成研修(2級課程)開講 第1回コーディネーター全体研修会 (財)安田火災記念財団からの贈呈式 県介護実習・普及センターにて介護実技の講師を務める
8 月	コープしずおか主催のホームヘルパー養成研修(2級課程)にて実技講師を務める 富士市より委託を受けてホームヘルパー養成研修(2級課程)開講
9 月	特定非営利活動法人認証 法務局へ法人登記 第2回コーディネーター全体研修会 NHK学園高齢者福祉フォーラム
10 月	赤い羽根、街頭募金に協力 静岡県民間在宅福祉サービス事業者発起人会議出席 島田市との共催でホームヘルパー養成研修(2級課程)開講 富士市より委託を受けてホームヘルパー養成研修(2級課程)実技講師を務める 新コーディネーター研修会 ケアマネージャー連絡会発足
11 月	コープくらしの助け合いの会、全国ネットワーク第4回全体会 埼玉県鳩山町議員福祉文教委員会メンバーの訪問 第1回議案検討委員会 臨時総代会(ワーカーズコープ夢コープ解散時期の変更について) 静岡県民間在宅福祉サービス事業者協議会設立総会 共同募金会(静岡市)来局 中堅ヘルパー研修(静岡地区・東部地区)
12 月	居宅介護支援事業者の指定下りる 中堅ヘルパー研修(西部地区) ホームヘルパー養成研修(3級課程)にて講師を務める 朝日新聞社の取材を受ける 富士市より委託を受けているホームヘルパー養成研修(2級課程)閉講式 第2回リーダーヘルパー全体研修会
1 月	介護保険プロジェクトチームは、介護保険事業部会として引き継ぐ 島田市との共催のホームヘルパー養成研修(2級課程)閉講式 第3回コーディネーター全体研修会 福祉人材確保ネットワーク推進会議出席
2 月	居宅介護サービス事業(訪問介護)の指定が下りる 中部地区運営委員会(福祉委員会)主催介護保険学習会 NPOに関する意見交換 静岡新聞社の取材を受ける ラジオ番組「こんにちは県庁です」電話による生インタビュー 第1回新コーディネーター研修会
3 月	静岡県民間在宅福祉サービス事業者協議会介護保険セミナー 介護保険対応ヘルパー研修会(静岡地区・中部地区) 中部地区介護保険指定事業者説明会出席 NPOミレニアムフォーラムにパネラーとして参加(理事長) 住民参加型在宅福祉サービス団体育成研修会(東部地区・西部地区)にパネラーとして参加

(「2000年度 特定非営利活動法人ワーカーズ夢コープ 通常総会議案書」2000年4月、pp.20~21)

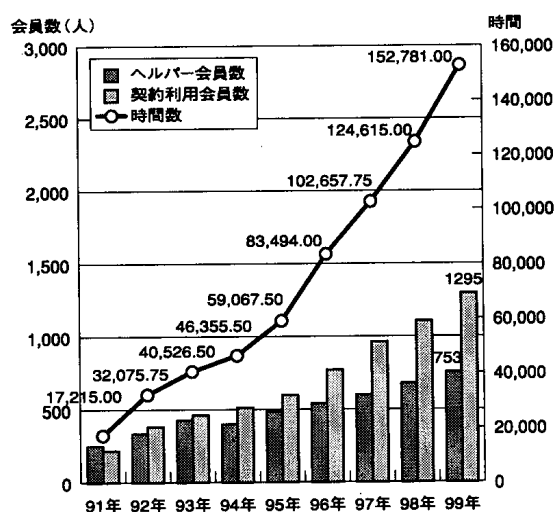
4章 地域福祉生活支援活動の推進

部」「西部」の4地区に分け、「介護保険事業部」と「くらしの助け合い活動」の二本立てで事業をおこなっている。4地区それぞれにヘルパー会、コーディネーター会が組織され、さらに14のヘルパー会に分かれている。全体での理事会、理事懇談会、三役会、総務会や、介護研修・ニュースなどの委員会、その他インターネットのプロジェクトチームや介護保険事業部会も組織されている。年1回、通常総会が開催されている。

事業内容は、介護保険事業と「くらしの助け合い」活動における介護・家事援助活動、子どもの世話、ケアプラン作成などのほか、行政などとの共催・委託によるホームヘルパー養成研修の開催、入会時研修、ステップアップ研修をはじめとした新人・中堅・リーダーなどのコーディネーター・ヘルパーに対する地区・全体での各種研修会・学習会、「夢コープニュース」の発行、などをおこなっている（1999年の活動経過については表6参照）。

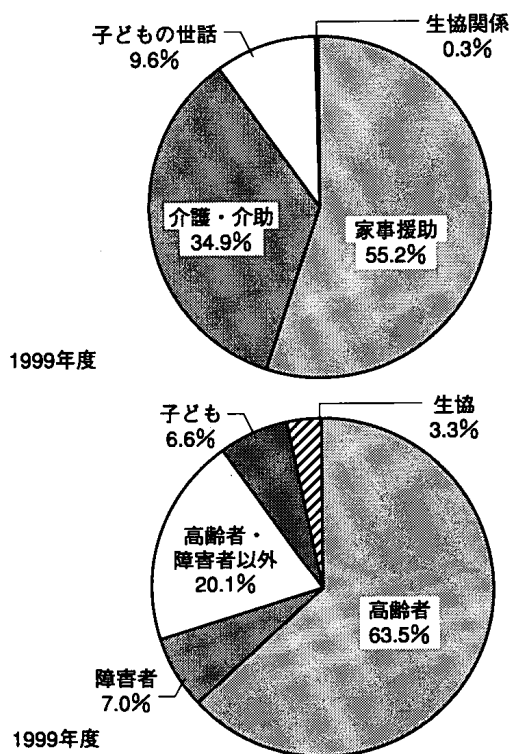
「くらしの助け合い」活動の9年間の動きについてみると、ヘルパー会員、利用会員、活動時間数ともにのびていることがわかる（表7参照、また援助内容と対象者については表8参照）。2000年4月からは介護保険事業

〔表7〕夢コープ9年間の動き



（「2000年度 特定非営利活動法人ワーカーズコープ 夢コープ 通常総会議案書」2000年4月、p. 3）

〔表8〕夢コープ 1999年度援助内容と対象者別活動内容



（「2000年度 特定非営利活動法人ワーカーズコープ 夢コープ 通常総会議案書」2000年4月、p. 3）

[表9] 夢コープ2000年5～7月活動実績

<くらしの助け合い活動>

	5月	6月	7月
登録ヘルパー数	779人	789人	798人
当月利用件数	536件	526件	561件
活動時間数	9,918.25 h	10,984.00 h	10,998.50 h

<介護保険事業部>

	5月	6月	7月
登録ヘルパー数	181人	187人	195人
当月利用件数 介護支援事業	54件	57件	64件
介護サービス事業	114件	117件	130件
活動時間数	3,214.25 h	3,253.5 h	3,682.75 h

(「夢コープニュース」No.77～79、2000年6月～8月から作成)

にも参入し、5月から7月にかけては「くらしの助け合い」活動、「介護保健事業部」ともに利用時間数を延ばしている(表9参照)。介護保険が導入されても、今までの信頼関係で引き続き「夢コープ」を利用していることがわかる。介護保険と「くらしの助け合い」の両方を利用しているケースも増えているという。また、介護保険制度により、利用者が様々な手続きに煩わされているという弊害もあるが、それまでの夢コープの利用者にとって利用料金の負担が軽くなったこと、ケアマネージャーが入ることによって利用者が複数のサービスを利用しやすくなり、事業所への苦情もいやすくなったこと、サービス事業者に民間・公的機関の区別がなくなり連携がとりやすくなったことなどの利点もあるという。

利用会員は入会金3,000円、年会費2,000円を支払い、利用料金として1時間あたり1,000円(月～金曜日の午前9時～5時の料金、それ以外は1,300円[税別])と交通費実費を支払う(介護保険事業については別料金)。ヘルパー会員は加入にあたって、年会費2,000円を支払う。ヘルパーとして仕事をすると1時間あたり840円(月～金曜日の午前9時～5時の料金、それ以外は1,040円)が得られる⁽⁷⁾。利用料金とヘルパーの労働報酬との差額は、夢コープの運営資

4章 地域福祉生活支援活動の推進

金に当てられる。生協の組合員活動としての「助け合いの会」と比べると、利用料金も労働報酬も高めになっているが、これは「事業」として行っているため、専門性を高める研修費用や事務所維持費用などがかかっているためと思われる。「助け合いの会」では「助け合い」としてのボランティア性、日常生活での経験を活かした活動としての側面が強いが、「事業化」した「夢コープ」は「助け合い」という理念を基本にしつつもヘルパーとしての「専門性」＝プロとしての「仕事」という側面が強いといえるだろう。その「専門性」を磨くための学習会、研修会などが数多く実施されている。

その他コープしずおかの組合員による福祉活動には、福祉の学習の場として各行政区ごとに運営委員会を発足しておこなう「生き生きライフ講座」、介護保険制度についてや「もし家族が倒れたら」と題した「福祉学習会」、ユニセフ活動などがある。

「夢コープ」の特徴としては、「その人らしい生活の自立支援」をめざした利用者本位の活動であること、全体だけでなく4地区ごとにヘルパー会、リーダー会、ケースカンファレンスなどの研修会が行われ、地区ニュースも発行され、年度総括・計画も各地区ごとにたてられるなど、地区の活動が基礎にあって「夢コープ」全体がなりたっているということがあげられる。

以上、3節では、みやぎ生協とコープしずおかを事例として、主に「くらし助け合いの会」を中心に生協の組合員活動についてみてきた。

2つの事例は、ボランティアである「助け合いの会」の活動と特定非営利活動法人として事業化された「夢コープ」という大きな違いはあるが、「助け合い」、利用者本位という理念は共通しているといえる。また、みやぎ生協の場合は、生協本体が主に介護保険事業を（介護保険適用ではない配食活動などの事業もいくつか行っているが）、それ以外の助け合いについては「コープくらしの助け合いの会」が、コープしずおかの場合は介護保険適用も介護保険適用外も「夢コープ」が事業としておこなっているという違いはあるものの、どちらも介護保険は福祉事業・活動の一部であり、介護保険を越えて福祉を考えているという点でも共通しているといえる。そして、これまでの購買事業や組合員活動でつちかった利用者の生協への信頼・安心が福祉事業・活動にも反映し、利用者・利用時間増につながっているといえよう。

地域共同体が崩壊する以前には、地域にこうした「助け合い」の関係が日常的にあった。高度経済成長を経て地域共同体が崩壊した今日、これらの「助け合い」のシステムは契約という関係にもとづいた新しい現代的な地域の協同のあり方であるといえよう。(菅原良子)

4 節 地域生活相互扶助システムの創造にむけて

本稿では、ボランティアな組織であるみやぎ生協の「コープくらしの助け合いの会」の生活支援活動と、特定非営利法人ワーカーズコープである「夢コープ(コープしずおか)」の生活支援活動を例に、今日地域社会で実践されている生活支援活動を分析してみた。これらの組織が行っている生活支援活動は大体以下の通りになっている。

※ボランティアな組織の場合

①家事援助活動を中心にした生活支援活動：

洗濯・掃除・料理・買い物など

②ふれあい配食活動

③生きがい活動

④福祉に関する学習会活動

※NPOの法人格を得た場合

⑤介護保険制度の適応を受ける専門的活動

⑥労働報酬を得ることのできる事業

以上の活動内容は、生活していく上で必要となる基本的な生活支援をほぼカバーできるようになっているように思われる。また当初は高齢者を対象としていた支援活動が、障害者や病人さらには産前・産後の妊婦や子育て最中の母親に対する支援活動へと拡大することにより、従来の福祉行政にみられた、サービス提供側の基準に基づく「恩恵としての福祉事業」に代わって、受益者の側に立つ基準に基づいて受けるサービスを人々が自由に選択できる時代になってきたとも言える。これは生存にかかわる領域や個人のプライバシーの領域を、現時点では事業化という危険性を含みつつも、サービスの受益者が自

4章 地域福祉生活支援活動の推進

分自身で保護していく第一歩になるであろう。また自らの力で自らの生活を守る活動が、「まちづくり事業」として地域社会全体に広がっていくことにより、本当の意味での地域自治あるいは真に自立した地域社会の建設につながる可能性もある。

かつての農村共同体の生活相互扶助システムは、集団的農業作業という地域の経済活動の中から形成されていったものであると同時に、年中行事といった農村文化をも創造してきた。すなわち、「生活相互扶助の共同社会」「集団的農業作業」「年中行事」というものは、それぞれが地域社会の一面であり、「同じ何かの別の側面」とも言い換えることができるものである。この「同じ何か」というものは「地域経済」「地域社会」「地域文化」を貫く芯のことであり、言い換えるならば「生活」そのものと言うべきものである。生活相互扶助システムというものはこうした意味での「生活」に根差すことにより始めて、社会的機能として現実的力を持つのであるが、協同組合による生活支援活動は、地域社会全体の中で人々の「生活」全体を掌握し、協同組合事業の中から地域社会の文化が創造していくにはまだ至っていないように思われる。こうした意味で協同組合をベースにした生活支援活動はまだまだ多くの課題を残していると言えよう。(新田照夫)

註

- (1) 以下の、生協における組合員による福祉活動の全国的動向についての記述は、コープくらしの助け合いの会全国ネットワーク・日本生協連組織推進本部福祉事務局『コープくらしの助け合いの会活動全国ネットワーク情報』No.14(2000年7月)を参照した。特にことわりのない限り、2000年3月現在の状況である。
- (2) この「ふれあい型」食事会・配食活動は、「助け合いの会」の活動の一環として実施している生協もあれば、「助け合いの会」とは別に組合員によってつくられているグループの中の「食事会グループ」が実施している生協、また「福祉委員会」で実施している生協などさまざまな形態がある。
- (3) 以下、みやぎ生協の活動については、『こ～ぶくらしの助け合いの会第14回総会』(1998年6月)、『同15回総会』(1999年5月)、『同16回総会』(2000年5

月)、「はあと」No.18・20・21 (2000年5・7・9月)、「保存版 こんなにたくさん、あなたの力に!! みやぎ生協の福祉活動のご紹介」の他、みやぎ生協ホームページ (<http://www.miyagi.coop.or.jp>) と宮城県生活協同組合連合会のホームページ (<http://www.miyagi.coop.or.jp/kenren>) の情報、その他みやぎ生協提供資料を参照した。

(4) 「コープ福祉ネットワークセンター」は、ボランティア活動をしたいと思っている個人・団体を登録し活動のコーディネートを行っている。その他、みやぎ生協では社会福祉法人「こーぷ福祉会」を設立 (1999年2月)、「こーぷのお家桜ヶ丘 桜ヶ丘デイサービスセンター」を開所した (1999年3月)。同じ建物内には「桜ヶ丘訪問看護ステーション」(1999年7月開所)、「桜ヶ丘福祉情報相談センター」(同)、「桜ヶ丘ヘルパーステーション」(1999年12月開所)、「桜ヶ丘在宅介護支援センター」がある。みやぎ生協の事業としては他に、福祉や介護の相談にのる「みやぎ生協福祉情報相談センター柏木」、買い物代行する「こ〜ぷふれあい便」、日本生活協同組合連合会の福祉用具カタログ販売「コープふれあい専科」、福祉分野で活動するNPOや市民グループを助成するための「こ〜ぷほっとわ〜く基金」などがある。また、宮城県では、宮城県生活協同組合連合会やみやぎ生協をはじめとした宮城県内の生協関係組織、こーぷ福祉会、農協、介護関係のNPOなど14団体で「介護サービス非営利団体ネットワークみやぎ」を設立した (1999年9月)。良質なサービスを提供するための情報の交流、研修、行政への働きかけ、介護保険情報・相談センターの設置などを活動内容としている。このように宮城県では非営利・協同のネットワーク化がすすんでいる。今後はこのようなネットワーク活動がさらに重要な活動になっていくと思われる。

(5) 以下、「夢コープ」とコープしずおかの事例については、「2000年度通常総会議案書」(2000年4月)、「夢コープニュース」No.77~79 (2000年6月~8月)、「夢コープの概況 入会前資料」、「コープしずおか たすけあいニュース '98福祉活動のまとめ」(コープしずおか組合員活動部、1999年5月)、「同 '99福祉活動のまとめ」(コープしずおか総合企画室、2000年5月)、「生き生きライフ講座すすめ方の手引き」(コープしずおか総合企画室、2000年6月)、「夢コープ」ホームページ (<http://www2.tokai.or.jp/npo>).

4章 地域福祉生活支援活動の推進

yumecoop/)、コープしずおかホームページ (<http://www.coop-shizuoka.or.jp/>) の他、コープしずおかと「夢コープ」提供資料を参照した。

- (6) ワーカーズコープについては、I-2章4節参照。
- (7) その他に賛助会員を1口1000円から募集している。1999年度現在、320名・455口の賛助会員がいる。「夢コープ」への援助金、コープの「たすけあいニュース」作成・発送費用、会員募集チラシ作成費用などにあてられている。

その他参考文献

- ・一番ヶ瀬康子監修・立川百恵著『高齢者福祉と生協・農協—参加型地域福祉実践例として—』（一橋出版、1999年）
- ・『介護保険を越えて、質の高い福祉を創る 福祉プロジェクト報告書』28号（くらしと協同の研究所福祉プロジェクト）
など

（この論文作成にあたって、生活協同組合ララコープ、コープかながわ、コープケアサポートセンター青葉、神奈川ゆめコープ、神奈川ゆめコープくらし助け合いの会「ゆいねっと」、神奈川ワーカーズ・コレクティブ連合会、コープしずおか、特定非営利活動法人ワーカーズコープ夢コープ、ちばコープおたがいさま介護センター、みやぎ生協の方々に資料を提供いただきました。この場を借りてお礼申し上げます。）